

カパドキア「大鳩小屋の聖堂」の壁画プログラム再考

愛知教育大学
浅野和生

カパドキア研究の泰斗ジェルファニオンがこの洞窟聖堂を調査したとき、地元住民により鳩小屋として使われていたため、「大鳩小屋の聖堂」の名がある。プロテシス（典礼準備室）にはビザンティン皇帝ニキフォロス2世フォカスと皇族らの肖像が描かれており、壁画の制作年代が絞られる。ニキフォロスはカパドキアの軍人貴族フォカス家の出身で、アラブに対するキリキア遠征の際、964～5年の冬に同地に滞在した。それがこの聖堂の成立に関連するというのが定説である。

この聖堂の壁と天井には、全面にフレスコ画が描かれている。北壁の下段には、光輪を持つ2人の騎馬像がある。銘文から、ひとり「マギストロス（官職名）のメリアス」とわかり、もうひとはイオアニスという名であったと思われる。このふたりは、ニキフォロス麾下の将軍イオアニス・ツィミスケスとその部下メリアスであったと考えられてきたが、在世の軍人にもかかわらず光輪があるなど不可解な点がある。発表者は、この騎馬像は9～10世紀初めの将軍イオアニス・クルクアスと、やはりマギストロスであった同名のメリアスで、対アラブ戦争で大戦果を上げた先達者として描かれたと推測する。騎馬像の後ろにセバステの40人の殉教者のうちの10人が歩兵として従う異例の表現がされているのは、メリアスがセバステ周辺の地域を根拠地としていたためであろう。また、ニキフォロスは戦死した将兵が殉教者の榮譽を受けられるようにしたいという政策を持っていた。ふたりに光輪をつけて描いたのはその考えを反映していると考えられる。

天井から壁にかけて描かれたキリストの物語場面のうち、「洗礼」は物語の順序を離れて西壁の最下段に描かれている。長塚安司氏は、この場面の前に洗礼盤が置かれて洗礼がおこなわれたと推測しており、発表者はこの説を支持する。さらに、南壁と西壁の最下段に描かれた「十字架降架」「キリストの埋葬」「聖墳墓参り」「冥府降下」の一連の場面については、葬儀の際に棺がこの前に置かれたと推測する。アプスにはマンドルラに包まれた「栄光のキリスト」が描かれていたが、死者はそれに向かって起き上がるよう、棺は西を頭にしてこれらの壁画の前に安置されたであろう。

ニキフォロスがキリキア遠征の途次カパドキアにいたとき、この地域の人々の洗礼や葬儀に立ち会って支持を固めようとしたことは十分考えられる。皇帝・皇族の肖像が、典礼参加者の行列が出発するプロテシスに描かれたのはそれを記念するためであろう。「大鳩小屋の聖堂」の寄進者はおそらくフォカス家の一員かそれに近い人物で、皇帝の事績を記念するこの壁画を描かせ、地元住民の用に供することによりフォカス家の威信を高めようとしたと考えられる。